TOPICS

間口一間半の家

村山隆司
RYUJI MURAYAMA

浅草・雷門から徒歩10分、桜で有名な隅田公園に近いまだ下町の雰囲気が残っている場所に、この家は建っている。間口が3.2m、更に奥で半間ほど狭まる。西側に古い木造の2階建てが、ギリギリというか、庇、雨戸の戸袋がこちら側の敷地に浸入しており、更に使える空間が狭められ、残り建物有効一間半がやっとの幅であった。これも古い地割りのためで、この地域には度々見られる現象のようだ。南側に開いた一間半の間口を頼りに光、風を取り入れ、“家全体が階段室”との考えをもとに、スキップしている床を階段で区切るように計画し、少ない床面積をめいっぱい使うことを心掛けた。間口を最大限に活かせるように、一方向の壁だけの構成が可能な薄肉ラーメン構造を採用している。3階の居間部分に吹抜けを設けることで狭さを縦に開放しているが、壁面が広がり空間を両側から挟み込むように壁の存在感が増すことになった。その壁に、狭さの中にも空気の快適さを期待して「ヌリカラット」を採用した。塗り上がりは珪藻土よりも硬い感じを受けるが、表面の硬化性が良いためかしっかりと壁に塗られた感じが安心感を生んでいる。最大の売りである「調湿性が珪藻土の3倍」とのうたい文句は仕上がるまで期待薄であったが、完成後、2階から3階へと上がっていくと、計測はしていないが空気感ががらりと変わり、爽やかな空気の動きを感じることができた。また、藁すさを入れ、表面を多少ざらざら感のある仕上げにしたためか、音（声）の反射を柔らかく感じることができ、狭さからくる会話のトゲが少し丸くなっているように思われる。極端に狭い空間に、開放感と落ち着きを、という相反する期待を込めた設計に、今回大いに「ヌリカラット」は手助けをしてくれたように思われ、狭さ故の空気の体感が顕著であったことも功を奏し、次回の採用への期待を持たせてくれる検証ができた。✽

外観

むらやま・りゅうじ――建築家・村山隆司アトリエ一級建築士事務所／1952年生まれ。1982年、工学院大学大学院建築工学研究科修士課程修了。山下司建築研究所、中山繁信設計室を経て、1996年、村山隆司アトリエ一級建築士事務所設立。現在、工学院大学非常勤講師。
主な作品：八街の家（1997）、八王寺の家（2001）、泊楓居（2002）、新座の家（2004）など。

リビング

上――「ヌリカラット」詳細
下――リビングからキッチン方向を見る